ISSN 2186-1102

身延山資料叢書　四

目録集　四

身延山大学　東洋文化研究所

身延山資料叢書　四

目録集　四

身延山大学　東洋文化研究所

目次

緒言……2
日鏡筆『章疏目録』……7

緒　言

身延文庫典籍資料の概要については、『身延文庫典籍目録』全三巻（上・中・下、二〇〇三～〇五年）として身延山久遠寺より刊行されている。既刊の本『身延山資料叢書』については、左記の如き内容となっている。

『身延山資料叢書』第一巻　目録集一
　日乾筆『身延山久遠寺御霊宝記録』
　日遠筆『身延山久遠寺蓮祖御真翰入函之次第』
『身延山資料叢書』第二巻　目録集二
　日意筆『大聖人御筆目録』（御筆御書註文、台家聖教註文）
　日亨筆『霊宝目録』（「西土蔵宝物録」、「当山歴代等曼荼羅録」、「宝蔵並中央之廊下拝殿一切経堂古仏堂録・会合所・方丈位牌堂録・書写並摺写経録」）
『身延山資料叢書』第三巻　目録集三
　日朝『章疏目録』

本巻に収録した身延山久遠寺第十四世日鏡筆『章疏目録』（一冊）は、山梨県南巨摩郡身延町の身延山久遠寺内にある身延文庫に所蔵されている。本書は前巻収録の日朝『章疏目録』と深い関連を持つ目録である。

また原本保護の側面より写真版の一部には不十分な箇所もあるが、了とされたい。

（付記）

『身延山資料叢書』第三巻目録集三において、担当者であった木村中一は「日朝筆『章疏目録』」としたが、その後の研究によりただちに「日朝筆」と言い難い結果となり、また巻末に「行学院常住」とあることから、本巻においては「日朝筆」、「日朝所持」などの意味を含め、「日朝『章疏目録』」とした。

【木村中一　記】

解説にあたり、筆者である日鏡について、身延山大学東洋文化研究所主任 木村中一、同研究員　金 炳坤が担当した。また本巻刊行にあたり立正大学大学院文学研究科仏教学専攻博士後期課程 桑名法晃氏の編集協力を得た。

本巻で扱う日鏡筆『章疏目録』の書誌情報は左記の通りである。

身延山久遠寺第十四世善学院日鏡筆『章疏目録』一冊

・法　　量（全体）二十八・五×十八・〇／（題簽）一七・八×二・九

・架蔵番号（部）歴代部　第十四世／（著者）日鏡／（號）A、2／（冊）1

・書　　名「章疏目録」

※本巻には身延文庫所蔵本修補作業時（時期不明）に新たな表紙が付された。本巻においてこの新表紙を「表紙」、元表紙を「元表紙」と表記する。

一、日鏡について

身延山久遠寺第十四世善学院日鏡（一五〇七～五九　以下、日鏡と略記す）は字を印英とし、初め善学坊（房）日現と称した。日鏡の名は本資料にて明らかにした天文五年（一五三六）の『章疏目録』に示されるものがその初出とされる。

日鏡は永正四年（一五〇七）甲斐国山梨郡に生れるが、誕生の月日や両親の名などは明らかではない。幼少期に身延山第十二世円教院日意の門に入り、天文十三年には一ノ瀬妙了寺第八世より晋山されたと伝わるが、一ノ瀬妙了寺在住期間は明らかではない。その後に法兄にあたる宝聚院日伝の後をうけて身延山第十四世に晋んだとされる。『身延山史』などによると、晋山後には日鏡は日朝・日意・日伝の身延山歴代の後を承け、また日伝の後見をうけつつ、身延山の運営にあたり翌天文十四年には祖師堂宮殿を造営している。

日鏡は『西谷檀林・西谷法縁略史』などによると学徳兼備、道念堅固であって、武田氏や徳川氏は深くその徳行に信伏していたと伝わる。

天文十九年（一五五〇）には日興門流の甲州谷村の東漸寺第二世であった教運房日感が日鏡の学徳に感銘し、その寺と共に転派。身延末となっている（諸伝あり）。同二一年（一五五二）には波木井にあった八幡宮を片隈沢に移し、また甲斐国篠原の地に八幡社があったのを、弘治年中（一五五五～五八）その地に寺院を造営、八幡山法久寺と称した。

日鏡は身延山久遠寺に十三年、後を宝蔵院日叙に託して弘治二年（一五五六）西谷に庵室を設けて隠棲した。そして自らの号をとって善学院と名づけ、門弟教育に尽力するのである。これが後の西谷檀林の初めで、現在の身延山大学の淵源である。西谷檀林は慶長九年（一六〇四）身延山第二二世心性院日遠によって、その基が築かれ明治七年（一八七四）の廃檀に至るまでの約三〇〇年間、教学研鑽と発展、さらに法器育成に多大な貢献を及

ぼしていく。近世に入り諸檀林が整備拡充されるに伴い、檀林を中心とする学閥が形成され、中世日蓮教団（門流）に代わる近世日蓮教団を組成する原動力となっていった。それが現在の法類や法縁とよばれるもので、そうした中で西谷檀林出身者は日鏡の流れを汲むことより「西谷鏡師法類」といい、この名が示すように現在の鏡師法類の淵源は身延山西谷にあるといえるのである。

日鏡はまた隠居所として法雲坊をも創建している。この法雲坊には永禄五年（一五六二）先の宝蔵院日叙による記録が残されており、これが身延山内における「宿坊制度」の史料的初見とされる。しかし法雲坊はその後樋沢坊に合併して現在は存在しない。日鏡は閑居する事三ヵ年、永禄二年（一五五九）四月十五日、五三歳をもって寂した。

日鏡の著作としては『身延山史』や『身延文庫典籍目録』、および『日蓮宗宗学章疏目録』によれば『法則　日耀十三回忌法則』と本巻収録の『章疏目録』、『本尊口伝』一巻や『己証類聚集』一巻、『朝集抄』一巻と『逆修講法則』一巻がそうであるといわれるが、特に『身延文庫典籍目録』においては『朝集抄』一巻と『逆修講法則』一巻を日鏡の写本および所持本の扱いとする。また日鏡ゆかりの天台学関係の写本多数が現在身延文庫には架蔵されており、それらは『身延文庫典籍目録』では「筆写本」に分類されている。

（木村中一・金　炳坤）

本書を収録刊行するに当たっては、所蔵者である身延山久遠寺御当局のご理解とご許可を賜った。また身延文庫及び宝物館の関係各位には、原本の調査に特別のご高配を頂いた。記して感謝申し上げる。

日鏡筆『章疏目録』

身延山資料叢書　四　目録集　四

平成二十六年三月三十一日　発行

編集（本巻担当）
身延山大学東洋文化研究所　木村中一
金　炳坤

発行所　身延山大学　東洋文化研究所
〒四〇九―二五九七
山梨県南巨摩郡身延町身延三五六七
TEL（〇五五六）六二―〇一〇七

ISSN 2186-1102